

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01108

研究課題名(和文) 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発

研究課題名(英文) Development of Innovative Regional Education Contents for the Wellbeing of an Aging Society

研究代表者

青柳 かつら (Aoyagi, Katsura)

北海道博物館・研究部・学芸主査

研究者番号：30414238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者と協働で地域学習コンテンツを開発することを目的に、道内老人デイサービスセンターへのアンケート調査、モデル地での事例研究、映像アーカイブの構築、巡回展示会を行った。その結果、地域資源学習プログラム集とアンケート調査報告(報告書1)、地域学習、認知症予防プログラム、映像活用事業の記録集(報告書2)を製作できた。地域学習では、高齢者の心の健康、歴史・文化のアーカイブ、異世代の文化伝承が達成される効果が見られた。高齢者参加型の地域学習の普及には、事業の持続性を担保する多様な協働関係、高齢者医療・福祉関係者との連携が課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、プログラム開発とのための体制整備が比較的容易な人口稠密地ではなく、人口減少と高齢化の前線地である農山村地域で、地域創生の価値観を共有し、地域資源と地域の人材を多様に活用して、実践研究を進めたことに意義がある。研究を通じて、高齢者の心の健康づくり、地域の歴史文化の記録・保存、高齢者と若い世代の交流・文化伝承を実践でき、地域博物館等がその活動拠点として役割発揮するための具体的方策を明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：To develop regional education contents in cooperation with senior citizens, a questionnaire at elderly day service centers in Hokkaido, a study on model cases, an establishment of video archive, and traveling exhibition projects have been done. As a result, we produced a report on the programs and the questionnaire (report 1), a report on resource learning programs, dementia prevention programs, and utilization of the video archive (report 2). Regarding regional learning, this study finds positive effects upon elderly mental health, historical / cultural archives, and intergenerational culture transmission. Issues for widespread development of participation-based regional learning programs for the elderly include: various cooperative relationships to ensure sustainability of projects and liaison with elderly healthcare and welfare organizations.

研究分野：環境学・産業史

キーワード：博物館 高齢者 地域資源 映像アーカイブ ウェルビーイング 地域学習 世代間交流

1. 研究開始当初の背景

近年、人口減少や超高齢社会対策は全国の自治体に共通する課題となっている。北海道では高齢化率が 29.7%（2017 年）、若年女性が 2010-40 年で半数以下に減る、消滅可能性都市が 147（市区町村全体の 78%、2014 年推定）を占め、集落の維持や地域資源の管理が危機に瀕している。解決策の 1 つとして、地域博物館を拠点に、高齢者が持つ地域独自の知識を積極的に活用して、地域の個性や誇りを産み出す地域学習を各地へ広げるシステムが必要である。この活動の主体となる、高齢者の認知症予防・健康維持も重要である。本研究では、「博物館の連携」、「映像をツールとする世代交流」、「高齢者のウェルビーイング（幸福感）」に着眼し、実態把握とモデル地での実践研究から、地方創生と高齢者福祉に資する地域学習コンテンツの開発を行う。

2. 研究の目的

本研究では、上記の問題意識から、以下を説明・実践し、地域学習コンテンツを開発することを目的とした。

- (1) 高齢者のニーズ把握と課題の明確化
- (2) 協働による地域学習プログラムの作成と評価
- (3) 地域資源に関連する映像アーカイブの構築
- (4) 認知症予防プログラムの開発と実践
- (5) 情報発信と成果の普及

3. 研究の方法

- (1) 高齢者のニーズ把握と課題の明確化

高齢者の博物館利用の課題を明らかにするため、高齢者団体の多数ユーザーである道内老人デイサービスセンターのレク担当職員（N=588）へ郵送法アンケートを行った。データは、道央/道北の 2 地域の比較、博物館の高齢見学者との比較、博物館職員との比較、異なる群別での博物館利用促進策解明のため数量化Ⅱ類による解析を行った。

- (2) 協働による地域学習プログラムの作成と評価

モデル地である、士別市朝日町、名寄市智恵文にて、以下を連携実施した。①朝日郷土資料室、智恵文公民館を実施の場として、高齢者である参加者へ、生活史や地域資源利用の技術・知識を聞き取り調査した。②各学習区分に①の成果を当てはめ、地域学習プログラムを開発・試行した。③プログラム参加者に、行事評価やウェルビーイングを質問するアンケートを実施した。

- (3) 地域資源に関連する映像アーカイブの構築

地域に残る映像を残すには、映像だけでなく、関係する人々の経験や記憶を併せて残していくこと、複数世代の映像視聴の機会を創出することが重要である。この観点から、①下記(5)で開設した研究会ホームページ（HP）へ代表的映像資料をアップした。②下記(5)で実施した巡回展で映像展示を行ったほか、この展示会の関連講座として、開催館に開催希望の有無を尋ねたうえで、地域映像を楽しく簡単に視聴できるサロン（映像視聴サロン）を企画し、実践ノウハウ共有を行った。③関連講座にて、企画の有効性やサロン評価のための参加者アンケートと映像記録によるコミュニケーション分析を実施した。

- (4) 認知症予防プログラムの開発と実践

名寄市日進地区のカフェを拠点に、高齢者主体的な活動を支援すること、地域の大学教員等の知識を活用することを手法の切り口として、認知症予防活動を実践する市民活組織の結成を促した。この活動を通じて、認知症予防プログラムの開発と実践を行った。

- (5) 情報発信と成果の普及

①本研究プロジェクトメンバーを成員とする「博物館を拠点とする地域資源活用研究会」を発足し、同研究会 HP、同 SNS ページを開設して、情報発信を行った。②研究の中間成果として道北地区内で巡回展を開催し、開催館担当者へのアンケートによって事業を評価した。③作成した地域学習プログラム、聞き取り資料、映像アーカイブ活用、認知症予防プログラム等の成果を成果報告書として刊行し、ウェブ公開した。

4. 研究成果

(1) 高齢者のニーズ把握と課題の明確化

アンケートの結果、老人デイサービスセンターのレク担当職員（N=208）によると、70%弱が博物館を利用していたが、外出範囲内に博物館がない、博物館の情報発信の不足、休憩場所の不足といった問題を、地域別での有意差はなく、約30%と多数が指摘した。同センターのレク担当職員は、高齢見学者よりも博物館の情報発信とバリアフリーの不十分さ、高齢者の外出の少なさを多数が指摘した。レク担当職員は、博物館職員よりも、昭和の暮らしや自然の展示、懐かしい体験が、高齢者のニーズである、と多数が回答した。

数量化Ⅱ類の結果(図1)より、課題解決には、「回想法を知っており博物館を利用した層(群1)」には、博物館の広報を強化し、産業展示等の嗜好を展示に反映させたり、バリアフリーへの助言をもらうといった関係形成を行うこと、「回想法を知らず博物館を利用した層(群2)」には、体験型展示を増やすこと、「博物館を利用していない層(群3)」には、出張型のレクを提供することが重要である。

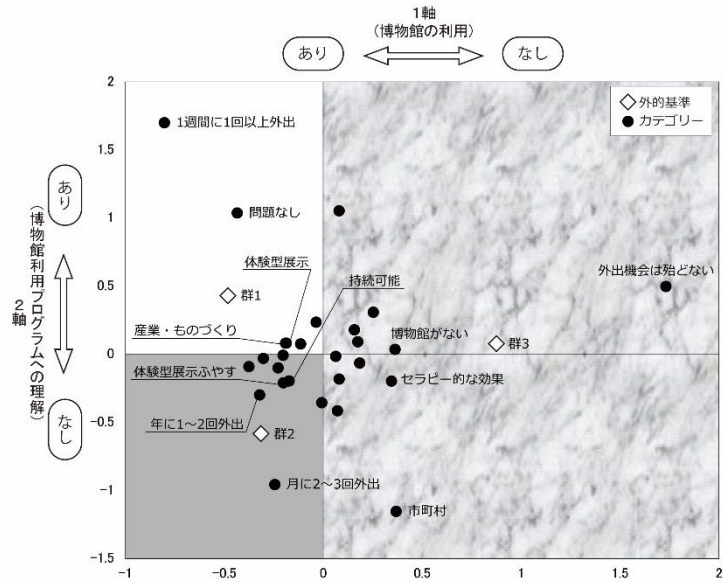


図1 博物館の利用と利用プログラムへの理解に影響を与えるカテゴリー
注)群1:回想法既知で博物館利用あり、群2:回想法知らず博物館利用あり、群3:博物館利用なし。網掛けなしは群1、網掛け左部は群2、網掛け右部は群3に関連の深い象限を示す。

(2) 協働による地域学習プログラムの作成と評価

①地域学習プログラムの作成と実施

地域学習プログラムの目的は、「高齢者の心の健康づくり」、「地域の歴史文化の記録・保存(アーカイブ)」、「高齢者と若い世代の交流・文化伝承」の3点とした。

そして、地域博物館・公民館を拠点施設として、朝日町では7、智恵文では12の、小中学校を含む組織・機関の協働関係によって、地域学習行事を開催する仕組みを作り、2地区計で延べ26回、15のプログラムを開発・試行できた(表1)。

プログラムの内容は、「サロン(昔の記憶を語る談話会)」、「体験」、「世代交流」の区分にて、農林業、商工業、生活文化などに関わる農山村の地域資源を幅広く取り上げた。(1)で得られた「昭和の暮らし」「自然環境」「懐かしい体験」「出張型レク」等のニーズも反映させた。2020年度以降は、三密回避等の感染症対策を徹底することで、一部の休止期間を除き行事を継続できた。

②プログラムの評価と今後の課題

プログラム参加者アンケート(N=26)では、事業目的について過半数の達成が見られ、主観的幸福感、主観的健康感といった回答者のウェルビーイングは高く維持されていた。一方、地域別では、事業目的のうち、朝日町では、「心の健康づくり」の達成は比較的少数に留まった。

この解決も含み、今後、高齢者参画型の地域学習プログラムを社会の仕組みとして、広域に広げていくには、博物館ら社会教育サイドと高齢者医療・福祉サイドが、地域連携する体制をつくり、例えば、保健師、医師、介護職らに、PDCA(計画・実行・評価・改善)サイクルに積極的に関わってもらうことが課題である。(青柳かつら)

表1 地域学習プログラムの実施概要

区分	テーマ	種別	実施回数(回)	
			朝日町	智恵文
林業	林業労働:馬追いの集材技術	サロン	1	
	林業労働:丸太運搬の道具	サロン	1	
農業	綿羊の飼育、羊毛ストラップづくり	サロン、体験	1	1
	羊毛の利用、羊毛から毛糸を紡ぐ	サロン、体験	1	1
	馬の生産と飼育	サロン、世代交流		1
	馬を使った米づくり	サロン、世代交流	1	2
商工業	装蹄所・でんぷん工場	サロン	1	1
	木工場・鉄工場	サロン	1	1
	砦職	サロン	1	1
生活文化	開拓期の食、きな粉もちづくり	サロン、体験		1
	昭和期の食	サロン	1	1
	開拓期の学校生活、紙石盤に字を書く	サロン、体験		1
	昭和期の学校生活	サロン	1	1
	暖房用具と冬の暮らし	サロン	1	
環境	天塩川の恵みと災害	サロン、世代交流	1	2
計			12	14

(3) 地域資源に関連する映像アーカイブの構築

①映像アーカイブの整備、活用実践

対象地域の地域映像の情報収集を行い、映像制作・保管の経緯に関する調査、簡易デジタル化、映像内容把握のためのショットリストの作成（地域映像の資料化）を実施した。巡回展示や映像視聴サロンで映像を利用するために字幕付与等の操作を行い、準備段階からの一連の実践ノウハウを、最終報告書にまとめ共有した。担当学芸員および関係者から、同種のサロン企画を今後実施したい、また自分たちでも実施できそうであるとの反応を得た。さらに、企画を通じて地域住民から新たに映像資料が提供された（地域映像の発掘）。アンケートでは、参加者全数から同種の企画にまた参加したいとの回答があった。地域映像アーカイブの整備や普及に関して、本企画の有効性や可能性を見込めることが明らかになった。

②地域映像視聴サロンの実践と評価

巡回展示と連動した会場で地域住民参加による映像視聴サロンを複数回実施（地域映像アーカイブの活用）し、改良・評価のための参加者アンケートと映像記録によるコミュニケーション分析を行った。サロン企画中の映像上映とフリートークの時間バランスの質問項目では、高齢者グループは「ちょうどよい」ないしは「少し話が少ない」と答えた回答で占められたが、若年層グループでは「話が多い」ないし「話が少し多い」と答えた回答で占められた。映像が撮影された時代を経験している高齢者の方が映像に対する知識量が多く、発話回数・時間が必然的に多くなる。若年層からの質問や疑問をフリートークの糸口にするなど、コミュニケーションの場に対する世代別のギャップをすり合わせる手法開発が重要である。

このサロンでは、受動的視聴を避けるために比較視聴を実践したところ、多くの参加者に効果が見られたものの、比較視聴が困難であったと少数が回答した。映像量やサロン進行速度とも相関が見られ、映像視聴に対する個人差も課題として明らかになった。その他、参加者の座席配置、開催地の地域映像の取り入れ、複数世代の参加などの要素が活発なコミュニケーションにつながる可能性があることが示唆された。

コロナ禍での企画実施となったため、幅広い年齢層を集めることが困難であった。若い世代（デジタルネイティブ）に届きやすい広報、参加しやすい運営方法が必要である。アンケート結果から高齢者は普段インターネットを使用せず、リアルスペースでのコミュニケーションを求めているが、対象地域では高校卒業後の若者世代が地域外に流出している現状がある。このような状況を踏まえると、サロン企画で世代間の知の伝承を担うためには、例えばハイブリッドでの実施も検討されうる。居住地住民だけでなく、関係人口や遠隔地に居住する当地出身者などを取り込んでいく仕組みの構築が新たに課題として浮き彫りになった。（山下俊介）

(4) 認知症予防プログラムの開発と実践

①事例勉強会と自発性を促進させる支援

活動初期は、名寄市智恵文地区にて、他地域での成功事例を紹介することから開始した。地域所在の大学の専門的な知識を有する教員及び若い学生たちとの交流などのメリットについて説明したうえで、実際の交流を通して、その有効性を確認してもらう支援を行った。その後、徐々に高齢者に自発的に活動を盛り上げていく雰囲気が芽生えるように促し、名寄市日進地区を拠点とする市民組織の結成を実現できた。

②専門家を講師とする学習会の開催とプログラム開発

地域所在の大学の教員などが地域の高齢者へ役立ちたい狙いもあり、その一環として、栄養学や社会福祉専門の教員などが、認知症予防に必要な情報を提供しつつ、活動の指導を行った。さらに、老年医療の専門家などの協力も得ながら、コロナ禍に対応した、在宅でも実践可能な健康関連の知識や筋力トレーニング（写真1）を盛り込むことにも留意して、プログラム開発を進めた。専門性を有する地域の人材を活用したことは、本活動の特徴である。

③認知症予防のための自主チェックリストの作成

既存の研究成果を活用して、認知症予防に役立つと言われる活動や知識を高齢者に普及した。特に、コロナ禍でフレイル状態などに陥らないように、自己チェックリストを作成し提供することで、高齢者の自己管理の徹底をサポートすることができた。

④活動の成果と課題

①～③を通じて、参加者から、他者とのつながりが強くなった、一人暮らしによって疎遠になりやすい人間関係が拡大された、多様な認知症予防活動への積極性が増した等、といった声を得られた。これらは、本活動の目的に直結しており、有意義な参加者の変容である。こうした活動がコロナ禍のような状況になっても影響されないこと、一人でもそして在宅でも継続される手法を工夫することが今後の課題である。（黄京性）



写真1 専門家を講師とする学習会の様子
（機能低下遅延のための筋力トレーニング）

(5) 情報発信と成果の普及

①研究会 HP の開設とその効果

研究プロジェクトの目的・計画を明らかにするとともに、活動や成果を蓄積して、地域関係者の理解や潜在的関心層の関心を得るために、2019年6月に研究会HPを開設した。開設後は適宜更新を行い、ページを充実させた。HP内ブログでは、メンバーによる研究進捗・報告、関心を紹介する計8件の記事投稿(600程度の記事閲覧)を行い、コロナ禍における地域との関係維持や研究プロジェクトへの関心の持続を促進することができた。

②研究会 SNS ページの開設とその効果

研究の応援者を得て、上記研究会HP閲覧へ誘導すること、研究の成果品ユーザーの開拓等を目的に、2019年3月にフェイスブックページを開設した。月2~3回程度の更新を行い、事業の予告と開催報告、モデル地の地域資源紹介、研究の成果品である報告書2冊の内容紹介等を発信した。博物館に関心を持つ市民、学芸員、教員、高齢者福祉関係者等の道内外のフォロワーが得られ、報告書紹介記事がシェアされるなどの効果があった。

③道北地区巡回展

2021~22年度、道北4市町で、「探してみよう! 地域のお宝」をタイトルとする巡回展を開催した(写真2)。展示会は、開発した地域学習プログラムを紹介するとともに、認知症予防プログラム等をパネルで紹介し、地域のお宝(地域資源)に関連した映像アーカイブを展示するなど、共同研究の成果を普及する内容とした。

開催館担当者へのアンケート(N=4)では、「地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた(目的1)」「(3館)」「開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた(目的2)」「(2館)」「博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた(目的3)」「(2館)」の回答が見られるなど、設定した事業目的について一定の達成が見られた。

④成果報告書刊行・公開

本研究で得られた成果を、報告書1(ビジュアルな事例集、写真3)・報告書2(プログラム記録集)として、2023年3月に刊行した。本報告書は、博物館・図書館等への配布したほか、研究受託機関である北海道博物館HP、研究会HPといったウェブ上に、ダウンロードページとその誘導リンクページを整備し、広く普及を図った。(青柳・山下・黄)

表2 巡回展の開催実績と開催館担当者アンケート結果

項目	開催館・展示会場	士別市立博物館	美深町文化会館COM100(ギャラリー)	美瑛町郷土学館	名寄市北国博物館
1 会期	2021年 7/24~8/22(20日間)		10/9~10/26(18日間)	12/4~12/30(23日間)	2022年 5/13~6/7(22日間)
2 観覧者数		394人	340人	309人	707人
3 関連講座の開催日		8/7	開催なし	12/18	5/28
4 関連講座の参加者数		11人	-	13人	18人
5 アンケート結果					
5-1 観覧者の属性					
5-1-1 多かった年齢層	高齢者(概ね65歳以上)	高齢者(概ね65歳以上)	子ども(概ね20歳未満)	高齢者(概ね65歳以上)	高齢者(概ね65歳以上)
5-1-2 多かった利用形態	一人、親子連れ ・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた	一人 ・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた	学校団体 ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた ・博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた	一人、カップル・夫婦 ・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた	一人、カップル・夫婦 ・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた
5-2 展示会を開催してよかったこと	・開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた ・博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた	・開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた ・博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた		・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた ・開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた	・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた ・開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた



写真2(左) 巡回展士別会場の様子

(2021年度、士別市立博物館)[同館撮影]

写真3(右) 報告書1「探してみよう! 地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集」



- ◆ 博物館での教育普及活動に
- ◆ 地域づくり活動の企画立案に
- ◆ 地域包括ケア推進のヒントに

道内老人デイサービスセンター対象「レクと博物館利用に関するアンケート調査結果」掲載!

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 青柳かつら	4. 巻 29
2. 論文標題 窓鋸：目立ての動画記録とスケッチ体験	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 森のちやれんがニュース	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら・山下俊介・黄京性	4. 巻 7
2. 論文標題 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（ ）：高齢者の地域知を活用した地域学習と巡回展事業	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黄京性・遠藤貴裕・寺岡聰希・千葉昌樹・加藤隆	4. 巻 12
2. 論文標題 北海道の高齢者におけるコロナ禍の影響 独居および高齢者夫婦のみ世帯の場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名寄市立大学社会福祉学科紀要	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら	4. 巻 5
2. 論文標題 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発 - 北海道内老人デイサービスセンターにおけるレクリエーションと博物館利用に関するアンケートの解析から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 203-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら・山下俊介	4. 巻 -
2. 論文標題 少子高齢社会の地域学習コンテンツの開発：名寄市智恵文の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第131回日本森林学会大会学術講演集	6. 最初と最後の頁 212-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら	4. 巻 17
2. 論文標題 高齢者と協働で地域学習コンテンツを開発します	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 森のちやれんがニュース	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら	4. 巻 4
2. 論文標題 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発：東旭川における高齢者参画型地域資源マップの効果と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青柳かつら	4. 巻 14
2. 論文標題 冬山造材を支えた道具「サツテ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 森のちやれんがニュース	6. 最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下俊介
2. 発表標題 地域資料と研究者の関係：地域史編纂の議論を手掛かりに
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第7回研究大会サテライト・セッション「多様な担い手たちによる地域資料継承セッション：急変する社会における地域資料継承の“これから”を考える」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青柳かつら・山下俊介
2. 発表標題 少子高齢社会の地域学習コンテンツの開発：名寄市智恵文の事例
3. 学会等名 第131回日本森林学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 青柳かつら・山下俊介・黄京性	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北海道博物館	5. 総ページ数 97
3. 書名 JSPS科研費18K01108報告書1 探してみよう！ 地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集	

1. 著者名 青柳かつら・山下俊介・黄京性	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北海道博物館	5. 総ページ数 698
3. 書名 JSPS科研費18K01108報告書2 高齢者のウェルビーイングを創成する地域学習コンテンツの開発：北海道北部地域における回想法サロンと聞き取り調査・地域映像活用・認知症予防活動の記録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

マスメディアによる報道
 ・探してみよう！ 地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集：博物館の可能性広げる秀逸な試み（「AFCプレミアムプレス」2023年5月号）
<https://www.asahi-afc.jp/features/view/337>
 ・市街地・商工業テーマに 名寄でちえぶん学講座（北都新聞2022.10.30.朝刊）
 ・ちえぶん学講座 市街地の歴史など紹介「地域資源いかした学習会」（名寄新聞2022.8.9.朝刊）
 ・動画から当時を学ぶ 北海道博物館・市北国博物館 名寄で巡回展関連講座（北都新聞2022.6.6.朝刊）
 ・冬山造材などテーマに 北国博物館で道北巡回展「探してみよう！ 地域のお宝」（名寄新聞2022.5.18.朝刊）ほか多数
 「博物館を拠点とする地域資源活用研究会」HP
<https://wellbeingas.wixsite.com/mysite>
 「博物館を拠点とする地域資源活用研究会」facebookページ
 （上記URLにリンク）
 北海道博物館HP
 ・研究成果報告書『探してみよう！ 地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集』など2冊を発行（報告書PDFダウンロードページ）
<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/news/detail21740/>
 ・2021～22年度企画展 道北巡回展「探してみよう！ 地域のお宝」
<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/past-exhibition/detail18009/>
 ・『北海道博物館研究紀要』7号、5号、4号
<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/>
 ・『森のちやれんがニュース』vol.29、17、14
<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山下 俊介 (Yamashita Shunsuke) (50444451)	北海道大学・水産科学研究院・特任助教 (10101)	
研究分担者	黄 京性 (Hwang Kyung Sung) (00412875)	名寄市立大学・保健福祉学部・教授 (20104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関